エジプトのネクロポリス（死者の都市）の一面
—サッカラのイドゥートのマスタバから—

吹　田　　浩

序

本稿は，ユーラシアと北アフリカに成立した諸文明の交流を，都市間のネットワーク，都市と農村の関係，民族間の接触のパターンの分析をつうじて解明していく共同研究の一つとして，古代エジプトの都市の特有なあり方と思われる「死者の都市」（ネクロポリス）からそのネットワークの一側面を取り上げる。具体的な事例として，著者が現在かかわっている「日本・エジプト合同マスタバ・イドゥート調査ミッション」の調査対象であるイドゥートのマスタバからの資料を用いて見てゆきたい。

古代エジプトの都市の実態の解明には難しい面が多い。そもそも古代の都市が遺構として残っているものが少なく，都市において日常に使われていた資料が必ずしも多くないことに理由がある。都市遺構として，ある程度全体的な姿が残っているのは，古代エジプトの三千年の歴史のなかでデイル・エル・メディーナ，アマルナなどごく少数に限られる。

また一般的に，古代エジプトの資料の多くが宗教的な性格を強くもつものであり，来世のために新たにつくられたものが多い。日常生活で使われたものは少なく，また体系性のある資料として使うのは難しい。

都市間のネットワークにかかわる史料では，先ず新王国時代の神殿の壁画に記録された戦勝記念の碑文の利用が考えられる。そこには多くの外国の都市の名前や産物の名前があげられている。しかし，しばしば言われるように，エジ

プトの史料の「非歴史的性格」のために，このような都市や産物の名前が正確に記録されているとは考えられない。多分に，誇張や形式的な表現によって記録されている。

以上のようなエジプト的な事情が都市の実態やネットワークの解明を難しくしている。

このような中でネクロポリス（死者の都市）とそのネットワークという観点から本稿を著わすのは，これらが古代エジプトに特有な一面を持っているように思われるからである。一般に都市にはそれに対応する墓地があるものであるが，古代エジプトではこの墓地の規模が大きく，またギリシア人からはネクロポリス（死者の都市）と呼ばれるなど，単なる墓地の範疇をこえていたように思われるのである。

ネクロポリス（死者の都市）とは，一般的に，大規模な墓場を意味する。しかしエジプトのネクロポリスは，墓地にとどまるのではなく，「都市」の機能をも持っていた。ネクロポリスは，生者も活動する生活空間として考えられ，さらに死者の都市の内部にネットワークがあったのみではなく，その生者の都市やさらには様々な生者の都市とのネットワークがあったと思われるのである。

この死者の都市に残された史料は墓主の来世での安寧を願って残された多くの碑文，描写，供物リストであり，また，死者の都市という名前から推察されるように，この都市の史料もまたほとんどが宗教的なものである。そのために，史料は現実に行われていた活動実態を正確に示すものではない。一方で，このような史料が当時のエジプト人が考えていた，あるべき世界が表現されているのも事実である。現実世界を前提にしていることも疑いがなく，本稿ではイドゥートの碑文を用いて都市ネットワークの切り口の一つとしたい。

1．ネクロポリスとピラミッド都市

そもそもエジプトの墓地を「ネクロポリス」と呼んだのは，小アジアのポントス出身のギリシア人，ストラボンである。彼は紀元前64年から紀元後24年頃

というローマのアウグストゥスとほぼ同じ時代に生きた人物で，当時知られていたヨーロッパ，北アフリカ，西アジア，インドという広大な地域について全17巻におよぶ『地理誌』を著わしたことで知られている。

エジプトについて記述しているのは，第17巻第１章の部分である。このなかで，ストラボンはアレクサンドリアのネクロポリスについて以下のように述べている。

「運河より外側には，なお市のごく一部が残り，それから郊外のネクロポリスが来て，ここには園，墓室，遺体をミイラにするための安置室が数多くある。」(10)[1)]

ここでのストラボンの用法が，ヨーロッパの諸言語に受け継がれていった。ネクロポリスは，その直訳が「死者の都市」であることから「(特に規模の大きい）共同墓地」「(歴史時代・先史時代の）埋葬地・古墳」[2)]のように考えられている。今日では，一般に古い時代の規模が大きい墓地がネクロポリスと呼ばれている。また，古代史の研究者もネクロポリスについて十分な定義を必ずしもしているわけではなく，内容や性格に多様性があるにせよ，ネクロポリスという用語を用いているようである[3)]。

しかしながら，ネクロポリスという語は古代ギリシア人によって広く一般的に使われていた語ではない。実はストラボンが，広大な地域の記述を行いながらもエジプトのアレクサンドリアについての記述にしか現れないのである。さらに他のギリシア人もこの言葉を用いることはなかった。

ストラボンは，「アレクサンドレイア市とそのネクロポリス」(14)[4)]という表現をしている。生者の都市と死者の都市を組み合わせて呼ぶこのような用法は，エジプトの都市の性格をよく表しているように思われる。ストラボンは，アレクサンドリアについて述べながら，実はエジプトに特有な都市のあり方を表していた可能性もあろう。エジプト以外の地域の墓地と異なった，新しい呼び方を作ることによって区別していたのではないかと思われる。

エジプトでは，初期王朝時代から末期時代まで355のネクロポリスが見つかっている[5)]。古王国時代までに限ってみても，161箇所があげられている[6)]。いかなる都市にも墓場が必要であるとはいえ，このような多くの，紀元前に遡る古代エジプト時代のネクロポリスが確認されるのは，それらが単なる墓場以上の機能を果たし，それに伴うもろもろの施設を伴っていたからではないであろうか。

古代エジプト人自身は，ネクロポリスのことを，ケレト・ネチェル *ḫrt-nṯr*（神の下にあるもの）と呼んでいたとされる[7)]。エジプトの文字では，単語の表記は，通常，発音記号と，その語の性格を表す決定詞から成る。このケレト・ネチェルに関しては，砂漠の性格を表す決定詞が付けられるのが通常である。したがって，この語はナイル川西方に広がる墓域を広範な地域として指しているように思われる。この点で，ネクロポリスという用語でのポリス（都市）とは異なっている。

それでは，古代エジプト人から「都市」とみなされていたものはあるのであろうか。古王国時代であれば，ピラミッド都市と呼ばれる亡くなった王の葬祭を司る都市がある。これは，疑いなく古代エジプト人から都市とみなされていた。個々のピラミッド都市の表記に都市の決定詞がつけられているからである。

このような葬祭を任務とする都市は，ナイル川の西岸にあった。ピラミッド都市が発展して，後世，エジプトの墓地がストラボンの時代にギリシア人から死者の都市と呼ばれるようになったのではないか。ストラボンの記述に見られるネクロポリス（死者の都市）の起原は，実は古王国時代のピラミッド都市に遡るような特徴にあったのかもしれない。

たしかにエジプトのネクロポリスは，考古学の史料が多いため精力的に発掘されてきたが，長く個々の墓や遺跡の発掘として行われてきた。ネクロポリスを全体としてとらえる視点は必ずしも十分であったとはいえない。

ある研究者は，次のように述べている。「それは［筆者注―ネクロポリスの研究］は，共同体の文化的な生活で何らかの役割を果たしている一貫性のある実体としてあまり共同墓地［筆者注―ネクロポリス］を研究してこなかった」[8)]

と。

古代エジプト人が都市とみなした以上，それは単なる墓場ではなく，生者の都市とのあいだに何らかのネットワークがあったであろう。

ピラミッド都市については，R. シュターデルマンに拠ると以下のように概観される[9)]。

> ピラミッド都市は，本来は河岸神殿の周辺に成立したものである。第3王朝では，ジェセル王をはじめとしてピラミッド都市を持っていなかった。第4王朝のメイドゥームやダハシュールのピラミッドがピラミッド都市を持つようになったが，それらの町の名前にはまだ都市の決定詞は付けられていなかった。第4王朝の後半か第5王朝になると，ギザの全領域が町としてまとめられた可能性がある。ピラミッド都市の発掘調査は，ギザでもサッカラでもまだ十分に行われている訳ではない。サッカラについては，第6王朝のピラミッド都市がメンフィスの一部として，中王国以降にも残っていたことが文献の上でわかっている。
>
> そもそもピラミッド都市の名前は，古王国の時期にはピラミッドの諸施設と同じであった。また，ピラミッド都市には，ヘム・ネチェル神官，ウアブ神官，朗読神官など儀式を司る者たちと，葬祭財団を管理する行政官などの住人がいた。さらに，建造物を管理する職人，農夫，肉職人，医者，ネクロポリスの監視人なども住んでいた。ピラミッド都市は，免税をはじめとする各種の特権をもっており，宰相，建築を統括する役人，アジ・メル役人（*ꜥḏ-mr*）などによって統治が行われていた。
>
> また，ピラミッド都市は，王宮と隣接していたと思われる。メンフィスという都市の名前は，ペピ1世のピラミッド都市メン・ネフェル・メリ・ラー（*Mn-nfr-mrỉ-Rꜥ*）から来ている。

古代エジプト時代には，亡くなった王のために墓と関連施設が大規模に作られた。古王国時代であれば，ピラミッドという王の墓，葬祭神殿，河岸神殿，

親族や家臣のマスタバ墓という広大な葬祭関連施設群であり，これらはピラミッド複合体を形成していた。この複合体は大規模なものであり，都市ともいえる規模であったろう。

さらにエジプト的であったのは，これらの葬祭関連施設に加えて，生者が生活するピラミッド都市が，河岸神殿付近にあり，日常的にピラミッド複合体とかかわって生活する人たちが多くおり，エジプト人自身からも都市とみなされていたことである。ここには葬祭関連の職を持つものばかりではなく，日常生活を行う上で必要な職を持つ者がおり，行政も役人によって担われていた。

このような死者の都市は，生者の町とは免税などの特権によって区別されていたとはいえ，互いに隣接し，緊密な関係にあったであろう。実際にメンフィスという名前が，本来はピラミッド都市の名前であったように，両者は一体となっていたのである。

以上のように，エジプトのネクロポリスのあり方は，エジプトの墓地を単に遺体を埋葬する場所や，記念のために建てられた建造物のある場所としないことは明らかである。たしかにストラボンが言及しているネクロポリスと，ピラミッド都市との間には数千年の時間が経っており，両者を直接に結び付けることはできないが，ストラボンが新しい用語を用いた背景としてエジプト的な都市のあり方があった可能性はあろう。

また，古代エジプト人がピラミッド都市の名前によって都市の部分だけではなく，ピラミッド複合体の諸施設をも一括して呼んでいたことも興味深い。ストラボンがアレクサンドリアでネクロポリスと呼んだものが，葬祭の施設だけではなく，住民の活動を含んだものであったとすれば，古王国時代のピラミッド都市の用法は，ストラボンと一致することになろう。

2．イドゥートのマスタバに見るネットワークの一端

ピラミッド都市がネクロポリスの原型であるかもしれない。少なくとも，両者には単に墓だけではなく，生者の都市という意味をも含んでいる点で類似している。そこで，筆者が現在かかわっているイドゥートのマスタバ墓の史料か

ら，もう少し都市としての側面を見ることができないか探ってみたい。

先ず，イドゥートのマスタバは，ウニス王のピラミッド複合体を構成している。ウニス王は，古王国第5王朝最後の王であり，そのピラミッドは，第3王朝ジェセル王の階段ピラミッドの周壁の南にある。本来のピラミッドの高さは42メートル（80エレ）ほどであったが，現在はひどく損傷している。このウニス王のピラミッド複合体とそれを管理する都市は，*Nfr-iswt-Wnis*（ウニスの座はすばらしい）と呼ばれていた。

ウニス王のピラミッド・コンプレックスには，イドゥート以外にも多くのマスタバが残っている。ただし，制作年代が明確でないものが多く，ウニス王と同時代のものであることを意味しない。これは，サッカラの土地柄，遺跡が近接して作られているからである。また，古王国の時代では碑文で個人情報を残すことが大変に少なかったことも，制作年代の決定を難しくしている。さらに，マスタバが墓泥棒の略奪にあったために，今日失われた情報も多い。あるいは，古王国当時や，後世に略奪（再利用・転用）にあって，本来の所有者が分からなくなったものも多い。

現在ウニス王のピラミッドの周辺にある主だったものは，ウニスの妻であったと思われるケヌート（*Ḫnwt*）とネベト（*Nbt*）のマスタバ，本稿で取り上げるイドゥート，彼女の兄か弟と思われるネブカウホル・イドゥ，イドゥートの息子と思われるメフ，イドゥートの夫と思われるビア・イレリをはじめとして，その他ウニス王の家臣であったと思われる者たちのマスタバ，イイネフェレト，ウニス・アンク，イイ，イシ，ケヌ，ヘリメル，ニアンク・プタハ，プタハ・シェプセス・イムピ，ウニス・ハイシュテフ，ネフェル・セシェム・プタハなどが葬祭神殿の近くにあり，さらに参道にそって，ニアンクバー，カー・イレル，ミトリ，ニカウ・プタハ，シメリ，ベビ，ヘテプ，ラクフなどのマスタバ墓がある。

イドゥートについても，情報は限られる。彼女のマスタバが，本来はイヒという人物のものであったことは分かっている。イヒと彼の家族についての情報は，マスタバが再利用された際にほとんど失われた。特に訪問者の目に触れる

地上部では丁寧に削除されている。地下埋葬室では，情報が削除されているとはいえ，彼の官職をある程度復元することが可能である。

イドゥートがもつタイトルは，「王の腹の娘」（*sꜣt nśwt nt ḫt.f*）のみである。彼女の本名はセシュセシュト（*Sšsšt*）であり，イドゥート（*Ꞽdwt*）というのは別名として与えられた名前である。前者を「大いなる名前」といい，後者を「美しい名前」と言う[10)]。

通常，彼女のマスタバ墓がウニス王のピラミッド複合体の一部となっていることから，ウニス王の娘と考えられている。ただし，彼女の召使いの名前に，ウニス王の次の王であるテティの名前を持つ者がいることから，テティ王の娘である可能性を指摘する研究者もいる[11)]。

いずれにせよ，このマスタバ墓はイドゥートの手によって来世の生活のために必要な改造が行われたと思われる。イヒのための碑文や描写は削り取り，自らのものに入れ替え，まだできていなかったところは自らのものをつくったであろう。マスタバに残されている描写や碑文は，たとえ，イドゥートの実際の生活を示すものではなくても，彼女にとって望ましい姿として，そしてあるべき姿と矛盾しないものとして残されているはずである。

マスタバでは，彼女が所領や家臣団を持っていたように描かれている。これらの表現や碑文の内容は，同時代の他のマスタバと類似した，形式化した表現パターンであり，事実を正確に伝えていることを前提にすることはできないが，イドゥートに限らずマスタバ墓を持つ者たちの何らかの事実を反映していることも疑いない。

さて，以上の前提にたった上で，ネットワークに関わるものと考えられるのは，碑文に見られる都市や村の所有の表現，その家臣の存在，供物リストに見られる供物とその量，祝祭の日での儀式などが考えられる。

イドゥートが自らの所領を持っていたことは，第3室［Kanawatiの部屋番号を使用する[12)]］西面の描写から窺える。添えられた碑文には，「王の腹の娘，その大いなる名前，セシュセシュトによって沼沢地と沼地を［見ること］[13)]」（Pl. 54）［Kanawatiのものを使用する[14)]］とあり，領地からの産物の管理状況

を視察している様子が描かれている。多くの労働者が牛の群れを渡河させ，猟師が多くの水鳥を捕まえ，漁師もまた魚を捕えている。さらに，牛の出産の場面もあり，あるべき領地の豊かさが描かれている。

イドゥートの背後には役人たちが控えている。破損して姿の一部のみが残っている者も含めて，19名を数える。彼らのうち4名の称号は破損して失われているが，その他15名は，「リンネルの長」(*imi-r ššr*)，「入り口の上級管理人」(*sꜣb śmśw hꜣit*)，「治安担当下級官吏」(*imi-ḫt sꜣw-prw*)，「治安官吏」(*sꜣ pr*)，「管理人，書記の監督官」(*sꜣb śḥḏ sšw*)[15]，「管理人，書記」，(*sꜣb sšw*)，「管理人，文書管理官」(*sꜣb iri-mḏꜣt*)，「宮廷の葬祭神官」(*ḥm-kꜣ pr-ꜥꜣ*) などの称号を持っている。

4名分の称号が失われているが，ここで窺えるのは，領地経営の一端であろう。リンネルなどの生活を管理する者，治安を担当する者［その主な仕事は，税を滞納した者への対応である］，書記や文書を管理する家政・行政担当者などである。

同様の描写は，第8室東面 (Pl. 62) にも見られる。ここでは，イドゥートの前に「下エジプトと上エジプトの彼女の地所と彼女の町の農地のすべての良き作業を見ること」とある。また，「最高級品をもたらすこと」とも書かれている。実際にここでは，様々な産物がイドゥートの前にもたらされている。牛の太ももなど各種の肉，水鳥やその雛，各種のパン，タマネギ，レタス，ロータスの花などである。役人の一人には「葬祭神官，リンネルの長」という称号が添えられてあり，この場面が供物をもたらしている場面であることを示している。もう一人の役人は，パピルスを広げており，「宮廷の葬祭神官，書記」の肩書きをもっている。

彼女が，地所 (*ḥwwt*) と町 (*niwwt*) をもっており，それらとのネットワークがあり，彼女のマスタバに供物がもたらされていることが示されている[16]。マスタバの各部屋には，このような供物の搬入や，牛の解体の場面が多く残されている。

一番奥の部屋である第9室の西面には，偽扉 (Pl. 68) がある。偽扉とは，西方に住まいすると考えられた故人が，この世に出てくるための扉である。あく

までも扉を模して作成されたものであり，実際に開くわけではない。ここには，故人がイスに座って飲食をする場面と，故人のためにある程度形式化された呪文，故人の肩書きと名前が書かれるのが通常である。

イドゥートにおいても，イスに座って飲み物を飲んでいる。彼女の前には，スライスされたパンが並べられており，「千のパン，千のケーキ，千のビール，千の牛，千の鳥」という呪文が添えられている。

このような数多くの供物は，いつ故人に捧げられたのであろうか。偽扉には，いくつかの祭の名前があげられている。「王が与える供物。アヌビス神が与える供物。彼女が西方砂漠の美しい道を行きますように。オシリス神が与える供物。声による供物（*prt-ḫrw*）が年の開始祭（*wp-rnpt*[17]），ワグ祭（*wꜣg*），トト祭（*Ḏḥwtt*），年の始まり祭（*tpi-rnpt*）に彼女のためにありますように」。少なくとも，ここにあげられている4つの祝祭の日には，様々な供物が捧げられたと思われる。

ここでの「王が与える供物」「アヌビス神が与える供物」「オシリス神が与える供物」という表現は，エジプトの供養碑にはよく現れるもので，ファラオ時代を通じて使われた。供物は，実際には故人の息子から捧げられるのが通常であったが，形式的には王や神々から与えられるという形を取っている。アヌビス神は死者をミイラにする神であり，オシリス神は復活を遂げた死者の神であり，このような供物を捧げる文にしばしば現れる。また，「声による供物」とは，供物を捧げる際に唱えられた呪文の言葉に関連がある言葉である[18]。

祝祭については，H. アルテンミュラーが以下のように述べている。「エジプトの祝祭の分析には，多層的な問題がある。多様な要素が考慮されなければならないからである。祝祭は，エジプト人自身によって『天の祝祭』（*ḥbw nw pt*）と『時間の祝祭』（*ḥbw tp trw*）に分類されているが，多様な暦形式（農業暦，恒星暦，太陰暦，世俗暦）に従って生まれている上に，多様な場所で，多様な時期に生まれている」[19]。祝祭の数が多い一方で，時間の経過の中で祝祭が行われる日が変化するなど，祝祭を扱うのは難しい。彼は，おおよそ以下のように述べている。

まず，「天の祝祭」には恒星暦と太陰暦がある。シリウス星が見え始めると行われるのが「年の開始祭」（*wp-rnpt*）である。太陽の次に明るい恒星シリウスは，１年に一度，70日ほど姿を消した後，日の出の太陽とともに東の空に昇ってくる。この時期は，ナイルの増水の時期と一致している。これがエジプトでの１年の始まりであった。サッカラ辺りでは，７月19日あたりである。１年の始まりを太陰暦で祝うものは，「年の始まり祭」（*tpi-rnpt*）と呼ばれた。

「時間の祝祭」は，１年を365日とする暦にしたがっておこなわれる。この暦では，４年に１度の閏年に当たるものがないために，暦はずれていくことになる。１年は，増水季（*ꜣḫt*），冬（*prt*），夏（*šmw*）という３つの季節に分けられる。そしてそれぞれの季節に４か月があり，それぞれの月に30日がある。そして最後に，5日の追加の日をおいている。

「ワグ祭」は，増水季１月に行われた祝祭であり，ピラミッド・テキストではオシリス神やシリウスと結びついている（Pyr. 820）。中王国の史料では，増水季の１月17日の夕刻より翌18日まで行われている。「トト祭」は，エジプト史を通して同月19日に行われている。

以上のように，アルテンミュラーは述べている。一方，彼に先立って，エジプトの暦の標準作品を出版しているパーカーは，「年の開始祭」以外の祝祭を太陰暦で説明している[20]。

「年の開始祭」は，シリウスが日の出の太陽とともに東の空に昇ってきた日に行われる。そして，その後の月が見えない日（新月・朔）から太陰暦での新年が始まり，この初日に行われるのが「年の始まり祭」である。さらに，この太陰暦では，「トト祭」は３年程度の間隔で年初に置かれる閏月「トト月」に行われる祝祭となり，「ワグ祭」は太陰暦の最初の月に行われる祝祭である。

パーカーが古王国時代のマスタバ（第４・５王朝）から祝祭の厳密な順序を挙げている[21]。年の開始祭（*wp-rnpt*），トト祭（*Ḏḥwtt*），年の始まり祭（*tpi-rnpt*），ワグ祭（*wꜣg*），*ḥb-Skr*，*ḥb wr*，*rkḥ*，*prt Mn*，（*ꜣbd*）（*n*）*śd*，（*tp*）*ꜣdb*，*tp śmdt*，*ḥb nb rᶜ nb* である。この順序は圧倒的なもの，と彼は述べている。

ここで，２点が触れられるべきである。先ず，イドゥートの祝祭は４つしか

挙げられていないが，その順序が「圧倒的な」順序に当てはまらないことである。イドゥートの祝祭がいつ，あるいは太陰暦で行われたかどうかは，まだ留保されるべきであろう。ワグ祭とトト祭の順序は，アルテンミュラーのものに近い。パーカーは，本来太陰暦で行われる祝祭が世俗暦（civil calendar）で確定された日にも行われるようになると述べている。その場合は，ワグ祭，トト祭という順序となる[22)]。イドゥートの場合，世俗暦で記されている可能性がある。

また，祝祭リストの「圧倒的な」順序にあげられている祝祭が，イドゥートのマスタバで書かれていないとはいえ，実際には行われたとすれば，このマスタバにもたらされる供物の量は飛躍的に多くなるであろう。特に，リストの最後の4つの祝祭は毎月行われるものである。多くのマスタバでは，このような相当量の供物がもたらされていたことになる。このような物流をささえるネットワークが前提となろう。

供物の名前や量を知ることができるものには，供物リストがある。イドゥートのマスタバでは偽扉と同じ第9室の西面，偽扉の右となりにある（Pl. 69c）。地下の埋葬室にも供物リストがあるが，損傷していており，筆者がかかわるミッションの修復事業の対象となっている。

以下にイドゥートの供物リストのおおよその内容を示した。個々の供物の詳細がわからない場合もあり，また，細かな翻訳をおこなってもネットワークの解明に必ずしも必要とは思われないため，供物の種類がわかる範囲にとどめた。

第1段（読みは横方向である）

項目の転字	その内容	数	項目の転字	その内容	数
s(ꜣ)ṯ	献水	1	*śnṯr śḏt*	香	1
śṯ-ḥb	聖油	1	*ḥknw*	聖油	1
śfṯ	聖油	1	*nḫnm*	聖油	1
-----	-----	1	*[ḥꜣtt] nt ꜥš*	聖油（杉油）	1
ḥꜣtt nt ṯḥnw	聖油（リビア産）	1	*ꜥrf wꜣḏw*	緑色顔料の袋	2

*ˁrf mśd(m)*ṭ	黒色顔料の袋	2	*wnḫw*	衣服	2
śnṯr śḏt	香	1	*ḳbḥw ṯꜣwi*	冷水と２ヶの（香の）粒	3
ḫꜣt	供物台	3	*ḥtp nśwt*	王の供物	3

第２段

ḥtp nśwt imi wśḫt	広間の王の供物	-	*ḥmś*	座れ[23]	-
šnś iˁw-r[24]	朝食のパン	-	*ḏwiw iwˁ-r*	朝食の飲物	2
t-wt	パン	2	*t-rtḥ*	パン	-
[nmśt] ḏśrt	飲物の容器	-	*[nmśt] ḥnḳt ḫnmś*	ビールの容器	-
šnś fꜣi(t)	パン　持込み	-	*ˁfꜣi(t)*	器　持込み	1
šnś n šb(w)	主食のパン	1	*ḏwiw n šbw*	主食の飲物	1
śwt	牛の足肉	1	*mw ˁ*	水　一回分[25]	2
bdi	ナトロン	2	*šnś ḏwiw iwˁ-r*	朝食のパンと飲物	-

第３段

t-wt	パン	1	*t-trḥ*	パン	1
ḥṯw	パン	2	*nḥrw*	パン	2
dptiw	パン	4	*psn*	パン	4
šnś	パン	4	*t-imi-tꜣ*	パン	4
ḫnfw	ケーキ	4	*ḥbnnwt*	パン	4[26]
ḳmḥw ḳmꜣ	パン	4	*[id]ꜣt-ḥꜣ.ḳ*	クッキー	4
pꜣwt	パン	4	*t-ꜣšr*	トースト	4
ḥḏw	タマネギ	4	*ḫpš*	（牛の）前脚	1

第４段

iwˁ	（牛の）股肉	1	*sḫn*	（牛の）腎臓	1
śwt	牛の足肉	1	*śpḥt nt śpr*	牛のリブ	1
ꜣšrt	焼肉	1	*mist*	レバー	1
nnšm	脾臓	1	*ḥˁ*	肉	1
iwf n ḥꜣt	胸肉[27]	1	*śr*	雁	1
ṯrp	雁	1	*st*	鴨	1
ś	雁	1	*mnwt*	鳩	1

t-s(i)f	パン	1	*šʿt*	パン	2

第5段

np³w(t)	ケーキ	2	*mswt*	夕食	2
ḏśrt	飲物	2	*ḏśrt i³tt*	ミルクの飲物	2
ḥnḳt ḥnmś	ビール	2	*ḥnḳt*	ビール	2
śḥpt	飲物	-	*pḥ³*	ビール	2
ḏwiw	飲物	2	*d³b*	無花果	2
irp	葡萄酒	2	*irp ʿbš*	葡萄酒	2
irp	葡萄酒	-	*irp*	葡萄酒	2
irp	葡萄酒	2	*ḥbnnwt*	パン	2

第6段

ḫnfw	パン	2	*i[š]d*	果物	2
ś[ḫ]t ḥḏt	白い麦	2	*ś[ḫ]t w³ḏ(t)*	緑の麦	2
ʿgt s[t]	煎った穀物	2	*ʿgt it*	煎った穀物	2
[b³]b³wt	穀物	2	*nbś*	キリストイバラ	2
t-n[bś]	パン	2	*wʿḥ*	イナゴマメ	2
ḫt nbt bnrt	甘いものすべて	1	*rnpt nbt*	年収のすべて	1
ḥnkt	供物	1	*gśw*	パン	1
śtpt	一級の食物	1	*ḥ³t wdḥw*	上質の供物台	1

※転字での[ ]内は，破損部分の復元，ないしは誤記の修正
※転字での( )は，欠字の補い

ここにあるリストの項目とその量は，形式化されたものであり，同時代のマスタバにもほぼ同じ形で見られるものである。供物を捧げる儀式は，水を捧げる儀式によって始まり，そのあと様々な供物が捧げられているのがわかる。上記の項目の中には，供物の名前ではなく呼びかけの言葉や「持ち込み」のような何らかの指示の言葉が入っていたり，供物の名前が「年収のすべて」や「一級の食物」のように漠然と広いものも挙げられている。

とはいえ，上記の96項目におよぶリストには，各種の香や油，27種にもおよぶパン（ケーキを含む），11種の牛の肉，5種の鳥，ビールや葡萄酒の飲物，

果物，穀類などが列挙されている。また，マスタバの壁画にも，多くの供物の場面が描かれている。牛の解体と左前脚の奉納の場面が多いが，鳥の奉納の場面も多い。供物の描写には，やはり各種のパンが多いが，その他，タマネギなどに加え，リストにはなかったレタス，パピルスなども描かれている

このようなリストにあるものが正確に捧げられたとは必ずしも考えることはできない。また，リストにないものも祝祭の日に捧げられていたと思われる。実に，多様にして大量の供物が捧げられたことが窺われるのである。

以上のようにイドゥートのマスタバから，死者が生前の所領や家臣団との交渉が葬祭財団として維持されており，年に少なくとも4回は祝祭の際に親族が集まり，供物を捧げていたであろう。このような意味で，エジプトの墓地は，生者の訪問を受け，生者の都市とのネットワークが葬祭の目的で維持されて，供物の奉納という物流が行われていたと考えられる。

結

本稿では，エジプト的な都市とそのネットワークのあり方の一つの切り口として，ネクロポリスを取りあげた。ストラボンが「ネクロポリス」と呼んだものは，単なる巨大な墓地ではなく，エジプト的な形式を持つとともに，都市的な性格を持つ墓地であったのかもしれない。紀元前後に生きたストラボンと，本稿で用いたイドゥートのあいだには二千年以上の開きがあり，両者を直接的に結び付けることはできないが，ストラボンが言及したアレクサンドリアの墓地のありかたにその語の起原が関係しているとしても不思議ではない。

ストラボンのいうポリスは，すでに古典期ギリシアのポリスとは異なり，人口や人口密度が大きいという意味であったであろう。そしてこのことは，ネクロポリスという語にもあてはまるであろう。この語によって，都市の内部や外部の都市とのネットワークの存在を意味したであろう。都市の内部では様々な職業の人たちが活動し，外部の都市との関わりを維持していた。

たしかにエジプトの史料は現実の活動を正確に復元するのが難しい面があり，本稿においても，現実の活動よりも，彼らが考えていた理想の姿に応じた

アプローチをおこなった。

古王国時代，多くのピラミッドが造られたが，亡くなった王の葬祭の世話を続けるためにピラミッド都市が造られた。ピラミッド複合体は，王のピラミッド，葬祭神殿，河岸神殿，親族や家臣のマスタバなどからなり，規模の大きいものとなっており，ピラミッド都市にはこれらの墓で働く人々が生活していたであろう。そこには葬祭にかかわる神官ばかりではなく，各種の職人，役人なども生活していた。エジプト人は，葬祭関連施設であるピラミッド複合体と，住民が生活していた都市部分を，合わせてピラミッド都市と考えていた。

本稿では，第5王朝のウニス王のピラミッド複合体からイドゥートと呼ばれる女性の史料から見てみた。葬祭財団と思われる彼女の地所があり，そこには20名近い家臣をもっていた。産物も，牛や鳥，魚，パン，野菜，果物，花など多様なものがあった。少なくとも「年の開始祭」，「ワグ祭」，「トト祭」，「年の始まり祭」では，マスタバの最も奥にある偽扉の前で行われたであろう。その時には，儀式にしたがって，供物リストにある100に近い産物が死者に捧げられたであろう。

このように，イドゥートの墓に見る都市像の一端は古代エジプトの墓が単に遺体の埋葬場所やその記念の場所をこえていることを示している。墓地では生者もまた活動し，都市として機能していた。墓主はいくつもの都市とのネットワークを維持していた。死者の都市がこのような広域なネットワークを持っていたとすれば，死者の都市は生者の都市に従属した都市ではなく，たとえ葬祭という独自の役割があるとはいえ，生者の都市と並ぶ役割を果たしていたと考えられるべきであろう。実際に，死者の都市はエジプト人によって都市とみなされて，独立して呼称され，人員が配置されていたのである。このようなことが，古代エジプトの都市の特色の一つであったことに疑いはない。たしかに，古代エジプトの墓域は「死者の都市」（ネクロポリス）と呼ばれるにふさわしいものであった。

※本研究は，平成15年度関西大学学部共同研究費において，研究課題「ユーラ

シアにおける諸文明の交流」として研究費を受けたものの成果の一部として公表するものである。

注

1）ストラボン，飯尾都人訳，『ギリシア・ローマ世界地誌』，第2巻（龍溪書舎，1994年），560頁。

2）『小学館ランダムハウス英和大辞典パーソナル版』，全1巻（小学館，1979年）より。

3）Cf. *Der neue Pauly : Enzyklopadie derAntik,* Vol. 8 (Stuttgart, 2000), pp.790-806.

4）ストラボン，前掲書，568頁。

5）*Der neue Pauly : Enzyklopadie der Antike,* Vol. 8, p.790.

6）*Lexikon der Ägyptologie,* Vol. 4 (Wiesbaden, 1982), pp.396-404.

7）*The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt* (New York, 2001), Vol. 2, p.511.

8）*Ibid.,* p.507.

9）*Lexikon der Ägyptologie,* Vol. 4, pp.9-14.

10）Cf. *Wörterbuch de Aegyptischen Sprache*[4], Vol. 2 (Berlin, 1982), p.428.

11）N. Kanawati and M. Abder Raziq, *The Tombs of Iynefert and Ihy* (*Reused by Idut*), The Australian Centre for Egyptology, Report 19 (Oxford, 2003), p.36f.

12）イドゥートのマスタバの図面は，最新のカワナティのものを利用した。*Ibid.*, pl. 49. 他には，以下の2種がある．R. Macramallah, *Le Mastaba d'Idout* (Cairo, 1935), pl. 2; *Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs and Paintings, III: Memphis,* Part 2, Fascicle 2[2] (London, 1979), pl. 63.

13）［見ること］の部分は破損している。他の墓の例から，“*mꜣꜣ*”か“*ḫns*”があったであろう。Cf. *ibid.,* p.45.

14）イドゥートの壁画の図面は，カワナティのものを利用した。

15）「管理人」と「書記の監督官」を分けて訳した。「管理人」（*sꜣb*）の正確な意味は分かっていない。Cf. R. Hannig, *Ägyptisches Wörterbuch,* Vol. 1 (Mainz am Rhein, 2003), p.1057, and p.1062.

16）もっとも，この碑文そのものはイヒのものである。接尾代名詞の「彼の」の部分が「彼女の」に変更されていることから明らかである。

17）カナワティは，“*wpt-rnpt*”と転字している。Kanawati and Abder Raziq, *op. cit.,* p.55.

18）Cf. A. H. *Gardiner, Egyptian Grammar*[3] (Oxford, 1957), pp.170-73.

19）*Lexikon der Ägyptologie,* Vol. 2 (Wiesbaden, 1977), p.171f.

20）Richard A. Parker, *The Calendars of Ancient Egypt* (Chicago, 1950), ss. 179-81.

21）*Ibid.,* ss. 176-178.

22）*Ibid.,* s. 181.

23）S. Hassan, *Excavations at Giza,* Vol. 6-2 (Cairo, 1948), pp.283-85. 死者を食料のもとへ

呼ぶ言葉である。

24）“*iʿw-r*”の読みは，カナワティに拠る。Kanawati and Abder Raziq, *op. cit.*, p.57. 以下も同様の読みをしている。Hannig, *op. cit.*, p.29.

25）Cf. S. Hassan, *op. cit.*, (Cairo, 1948), p.312.

26）カナワティは“？”をつけている。Kanawati and Abder Raziq, *op. cit.*, p.57.

27）カナワティは，“fillet”とする。*Ibid.*, p.58